

諦められない やまない雨はない

1953年4月26日朝日新聞朝刊 ©長谷川町子美術館

思い描いていたことが不意にかなわなくなるのは、いくつになっても悲しいものだ。私は幼いころから、極めて諦めが悪かった。楽しみにしていた家族行事に中止の話が出ようものなら、大変だ。要因は何か、回避する手段はないのか、延期の方向でいかがだろうか。こんな小学生、私の両親はさぞうんざりしたに違いない。

三つ子の魂百まで。今なお私は自分でも嫌になるほど往生際が悪い。だから1953年4月26日に掲載されたマンガの、サザエの気持ちがよくわかる。めかし込んだのに、窓の外には突然の雨。諦め切れぬサザエは、当時しばしば実験が行われた「人工降雨」である可能性に思い至り、气象台に問いたです電話をかけに行く。

*

ゴールデンウィークという言葉が生まれたのは1951年。こどもの日に公開された映画「自由学校」のヒットによる業界用語がきっかけというから、マンガが掲載された53年だと、一般にはあまり定着していないころだろう。とはいえ、週休2日もない時代。日曜だった26日から5月5日まで、飛び石ながら内4日も休日のあった10日間の始まりは、サザエならずとも平常心ではいられまい。多くの人が普段はできない計画を、どっさりたてていたに違いない。

それが、自分ではどうにもならない要因で、不意に奪われた。雨と新型コロナでは深刻さは比べものにならず、感染撲滅のため闘う方々には休む間もない。休業補償を巡る課題も待ったなしだ。それでも感染拡大で初の大型連休を迎えた今、人の心はそう簡単には割り切れず、サザエ同様、出られぬ窓の外を恨めしく眺めている人も少なくないのではなからうか。

諦め切れぬ思いの源は、執着だ。浅草西(とり)の市発祥の寺、長國寺(ちょうこくじ)(東京都台東区)の第30代住職、井桁榮秀(いげたえいしゅう)さん(33)は「生きているからこそ執着もする。ならば執着を捨てるのではなく、すべてを満たす一歩手前で我慢する、発想の転換も一つのあり方」と話す。

「仕事一本」だった先代住職の父(62)は、病で1回5~6時間の人工透析が1日おきに必須という。生活上の制限が増え、かつてはできても今はできないことが多くなり、「さぞつらかろうと思ったが、父は『**いただいた時間の中で、自分ができることを探してやるのに忙しい**』と、むしろうれしそうなのですよ」と井桁さん。

「できないことを探せば悲観しかない。でもマスクの作り方、世界の医療事情。**この世情でなければ知る由もなかった技術や知識がずいぶん、増えたのではないですか。不自由な中でこそ、できないことより今できることを数える。その方がずっと幸せになれますよ**」

*

街にも観光地にもにぎわいのない異例の連休さ中だが、やまない雨はなく、明けない夜もない。新型コロナは人工降雨のように調節はできないが、「外出自粛」という一人ひとりの我慢と努力の結集で、感染拡大の雲を散らし、再び太陽の下に出かけられる日を早めることなら、きっとできる。

これほどの困難を乗り越えた後の世界であれば、一人で越えられぬ壁に出合っても、きっと自然に手をさしのべ合うことができる社会に、一歩前進していると信じよう。万が一なっていなければ、実現するその日まで、自分に何ができると、知恵を絞り続ければよいだけだ。諦めの悪さは、きっとその時、吉と出る。

(西本ゆか)

